

第6章。 システム論

	<u>ページ</u>
6-001 システム論と生命	183
6-002 動的非平衡システム(第二世代)の特徴	186
6-003 自己組織化ー1	189
6-004 自己組織化ー2	191
6-005 オート・ポイエーシス・システム(第三世代)	195
6-006 オートポイエーシスシステムとの関連	201
6-007 オートポイエーシスシステムへの疑問	202
6-008 オートポイエーシスシステムの重点まとめ	203
6-009 エントロピーと生物、進化	204
6-010 免疫系システム。 生物学的な自己認識	206
6-011 免疫システム	211
6-012 記憶のメカニズム	215

6-001

システム論と生命。

生物の進化は、異質の原子が、外部からの力によることなく、相互に情報を伝達しながら互いに接触し、生物学的な特徴をもつ糖・アミノ酸・有機塩基などの分子にまで変化し、それらが集まってタンパク質・細胞などへ階層を超えて進む一連の不可逆のプロセスである。

適応・動的平衡に関心が集中し、与えられた構造がいかにか安定・維持されるかについて知見が出された。1980年前後を境にして、ウオディントンの後成的プロセス理論、プリゴジンの散逸構造論、マトウラとバアレラのオートポイエーシス理論、アイゲンのハイパー・サイクル理論などを統合する新しい進化論が、エリッヒ・ヤンツの「自己組織化理論」として登場する。それまでの科学研究において、エントロピーが増大する過程については解明されていた。しかし生きているシステムとしての生命を究明するためには、新しい自己組織化ダイナミズムについての理解が必要であった。

生きているシステムである生物システム、社会システムにおいては、自己組織化、自己調節、コヒーレント・システム行動、個性、環境とのコミュニケーション、共生、形態発生、進化などの現象・概念・理論などが理解されなければならない。

プロセス中心の世界観が必要であり、ハードなシステム要素から構成される構造重視の世界観とは明確な区分が必要である。機械のようなハードな空間構造が、プロセスを決定するという発想ではなく、プロセスにおける相互作用こそが、構造の開放的進化を導き出す。

新しい世界観においては、“成ること”に生命の本質が存在し、“在ること”は、成ることの一樣相とみる。このシステムは特定の時空構造に結びつけられることはなく、コヒーレントな進化を続け、相互関連をするプロセスの集合体として認識されることになる。これらの集合体が、ハードな構造に見られる硬直性とは違ったかりそめの大域的安定構造を一定期間の間出現させる。

これらはプロセス中心のホワイトヘッドの思想を継いでいる。細胞内の遺伝子情報としてプログラムされたものを絶対的なものとしてしか把握しない分子生物学とは似て非なるもので、生命とは、自己によって自己の行動が選択可能な自由な存在と考える。生命は、環境とつねに情報交換しながら、自己を律した自由の範囲内で生きていくための方略を次々に選択していく。システム進化を主軸とするプロセス中心の世界観では、自己決定と自己組織化が主役を演じている。

有機体論を、1. 部分－全体関係 2. 階層関係 3. 生成 などによって次の三つに分類される。以下はその分類に則ったもの。

世代	システムタイプ	主概念	研究者
第一世代	動的平衡システム	ホメオスタシス	ベルタランフィ(一般システム論) N・ウイーナー(サイバネティックス)
第二世代	動的非平衡システム	自己組織化	プリゴジン (散逸構造) アイゲン (ハイパーサイクル) ハーケン (シナジェティックス)
第三世代	自己生成システム	オートポイエーシス	マトウラーナ(オートポイエーシス) ヴァレラ(オートポイエーシス) ルーマン(社会システム理論)

・自己組織化システムとオートポイエーシス理論との差異。 ルーマン。

自己組織化は「構造」の組織化であるが、オートポイエーシスは「システムそのもの」の組織化である。オートポイエーシスは、自己組織化システムであるだけでなく、自らの「構造」を生産し、変更するだけではない。その自己言及性は、「他の構成素の生産」にも当てはまる。これは決定的な概念上の変革である。

システム自体にとって分解不可能な最終的な構成要素(個体)は、システム自身により「単位」として生産されるものである。このことは、要素にも、過程にも、境界にも、そして他の構造にも当てはまり、もっと重要なことは、システムという統一体そのものにも当てはまる。

第一世代。

動的平衡系。 ホメオスタシス(恒常性)。

- 物質代謝する有機体をモデルにしている。
 - 外界と物質代謝をしながら自己維持する秩序だった機構としての有機機構。
 - 形態は定常的形態や定常的関係の秩序維持の表現であり、結果である。
 - 動的平衡に達した安定した階層間の関係が取り出された。
- 環境と相互作用しながら自己維持し続ける機構とはどのようなものかという問いが、システム論の要となっている。
- 関係に主眼が置かれる。
- ホメオスタシス。 開放系のまま定常性を維持する。 ホメオスタチックな自己維持の機構。
- 一般システム論(バルタランフィ)。 要素の単純総和は全体と等しくない。
 - 開放性の物質代謝を行う自己調整的な自己維持システム。
- サイバネティクス。(ウイーナー)。情報のフィードバックによる制御、調整。
 - 神経細胞、人間集団、生理学現象。
 - ファースト・サイバネティクスは、順応的適応(adaptation)の概念を含む「負のフィードバック情報」を活用する現状維持の管理機構を重視する。
 - セカンド・サイバネティクス(丸山)は、逸脱を打ち消すプロセス(形態維持)と逸脱を増幅させる形態発生に対応させ前者をファースト、後者をセカンド・サイバネティクスと区分。
- 情報理論。(フォン・ノイマン)
- ゲーム理論。
- 決定論
- トポロジー(位相数学)
- ホロン
- 多階層関係論
- 構造主義生物学。

第二世代。

動的非平衡系。 自己組織化(構造の自己組織化)。

- 開放系として環境と物質代謝、エネルギー代謝をしながら自己形成し、そのシステムの形成を通して周辺条件を変化させていく機構に焦点を当てる。
- 各階層が階層として形成されていく機構が問われる。
- 生成が主眼におかれる。
- 形態とは連続的に生成プロセスを行うが故に静止しているシステムの表現である。
- 第二世代システムでは、関係ではなく生成に力点がおかれる。
- システムの現象は、動的平衡の結果ではなく、不断に生成プロセスを反復する動的非平衡である。
- 結晶、発生胚をモデルにしている。発生胚は形成過程のその都度の段階で動的非平衡であり、自己形成を行う。
- 自己組織化システムの論理は、現在未だ整理されていない。オートポイエーシス論の提起により論理そのものが改良されつつある。
 - 散逸構造論 (プリゴジン)とハイパーサイクル(アイゲン)の無機的自己組織化と有機的自己組織化が架橋されていない。
- 生成プロセス
- 散逸構造論 (プリゴジン)。無機的現象の自己組織化。
- 後成的プロセス理論(ウオディントン)
- シェリングの自然哲学
- シナジェチックス
- ハイパーサイクル。(アイゲン)。有機的現象の循環的自己組織化機構。
 - 変換反応のサイクルが一つの触媒として作用し、その触媒サイクルが全体として一つの自己触媒として作用する。
- 自己組織化システム論 (エリッヒ・ヤンツ)

第三世代。

自己生成システム。 オートポイエーシス(システムの自己組織化)。

この発想は古くはカントからあり、生物をオートポイエーシスの統一体と見なした。「各部分が全体の為に全体の力を借りて存在し、また全体も部分の力を借りて部分のために存在している」。現代では、マトウラーナとヴァレラが定式化した。「自らを作り出していく力をもつシステム」。

カウフマンは主張する。「集団的に自己触媒反応している分子の集まりは、二つのかたまりに分裂することで、自己再生することができる。・・・集団的自己触媒反応をする集合体に、中央指令機関などは存在しない。ゲノムもないしDNAもない。存在するのは、カントが探し求めている分子集団のオートポイエーシス・システムである。・・・中央指令機関は生命には必要ない。生命は必然的に全体性というものをもっている。

- ・既に確立した理論ではなく、今後これから形成されていくべき理論である。既に誤解や反論も多い。議論中のシステム理論であるが、私は宇宙論にも外挿できると考えている。
- ・神経システムから出発し、細胞システムや免疫システムに拡大していった理論構想である。
- ・このシステム論の4つの特徴。
自律性、個性性、境界の自己決定、入力と出力の不在(これには多くの議論がある)。
- ・自動車と有機体の差異。
車には4つの特徴がいずれも成立していない。
- ・有機体は自分の構成要素を連続的に産出し構成要素が有機体を構成する。そして有機体は自分の構成要素を産出する。この自分自身へと回帰する閉域を作る循環プロセスを有機体の唯一の必要条件とする。 産出関係の循環。
- ・神経システムがそれ自体の関連の内部でのみ作動している、とする。外的な物理的刺激と神経システムとが「非対応」から推測した。神経システムは自身の能動的な活動によって視覚像を構築する。神経システムは閉鎖系であり、システムの作動だけによって視覚像がもたらされる。
- ・神経システムは自分の構成要素と相互作用しながら作動する「自己言及システム」である。
産出されるのは構成要素だけである。システムは自己内を一貫して作動するだけ。
システムの作動が自己自身に回帰してゆく自己触媒的な自己言及システムである、とする。
ハイパーサイクルへの解釈とする。自己回帰的かつ自己言及的。
- ・自分自身を不断に生成し続ける自律的なシステム。
- ・徹底的に時間化されたシステムであり、動態的な側面を重視する。
「実体」として存在しているものではなく、絶えず「生成」されているものとして捉える。
- ・システムに基づく要素の構成。システムを構成する要素が、システムに先立つのではなく、システムの存在があってはじめて構成されえる。システムの要素はそのシステムの中でのみ意味をもつ単位体。
- ・神経システムは独自で視覚像を形成できる。自らの作動によって内部、外部を区別する。
- ・システムは自分の作動を通じて存在領域を定め、空間的位相領域を決定し、更に高次の自己言及を通じて時間を獲得する。
- ・ネットワークを空間に具体的な単位体として構成し、また空間内において構成要素は、ネットワークが実現する「位相的領域」を特定することによって自身が存在する。
- ・オートポイエーシス論。(マトウラーナ、ヴァレラ)。古くはカント。
細胞や神経系をモデルにしている。
- ・社会システム理論(ルーマン)。

6-002

動的非平衡システム(第二世代)の特徴。

1. 自己組織化の生成プロセスは偶然開始される。
2. カスケードの非可逆性。
生成プロセスが進行する場合と、戻ってしまう分岐点で一方の事態が生じれば、システム全体は雪崩を打つようにそちらに向かう。
3. 相転移。
分岐点において生成プロセスが進行すれば、システム全体の状態が一挙に変化する。
システムの小さな擾乱が大きな結果をもたらしている。
未分化な始源より分化した関係への相転移。
4. 生成プロセスの反復的進行。
ひとたび生成が開始されれば、その生成プロセスは反復的に進行する。
・システムの局所で偶然生じた生成プロセスは、システム全体に拡がっていく。要素には見られなかった秩序が突如形成される。要素と秩序の間には飛躍がある。
5. 自己境界の変動。
自己組織システムは環境との相互作用を通じて自己の境界を変化させていく。このシステムはシステム自体の作動を通じて周辺条件を変化させ、またそのことがシステムの作動に影響を与える。
6. システムの開放性。
自己組織システムは、環境との間で、「物質代謝、エネルギー代謝、情報代謝」を行う。
そのためシステムには入力、出力が不可欠であり、両者の差異はシステムを特徴づける重要な変数である。入力と出力の差異は、システムの外に立つ観察者によって捉えられる。
7. 自己言及性。
システムによって蓄積されたシステム自体に関する知が、当該システムの構造と作動に影響を及ぼす。

・結晶と相転移。

ランダムで勝手気ままな動きをしていた多数の分子が、なんらかのきっかけで、あるいは偶然に、秩序だった振る舞いを開始してしまう。分子の動きは「協働現象」を示す。分子自身が自己自身を組織化する。(自己組織化)。ハーケンの「協働現象」、「シナジティックス」。

化学現象におけるベロウソフ・ジャボチンスキー反応。

分子間の協働作用、分子が互いに協力して自分と同じ分子を複製するという、自己触媒作用が成立していると考えられている。これには80個ほどの化学反応が関与しているらしく全貌は未だ不明。

物理的な系はエントロピーが増大する方向に時間的に推移していくにもかかわらず、自己組織的な現象では、エントロピーの増大に反する現象が生じているように見える。

ローレンツやシュレディンガーは、有機体のような解放系は、負のエントロピーを外部より取り込んで自己維持を続ける、とした。このように開放系を強調することは、エントロピー増大の法則に逆行する現象の成立要因を外部に求めることであり、秩序化の可能性は外部に委ねられてしまう。
創発の可能性を外部から持ち込もうということである。

自己組織化のプロセスは反復的に持続しうるのが基本である。

・ゆらぎ。

ブリゴジンが言った「ゆらぎ」は、マクロ法則に逆行するような運動が、内在的に含まれるという事態のことである。ゆらぎは、システムに内在的に含まれ、「確率的頻度」によって表される、マクロな規則性からの逸脱である。そして平衡状態から十分へだたった状態においては、ゆらぎはかき消されず、むしろ増幅され、システム全体を巻き込み、エントロピー生成最小に対応した定常状態とは質的にまったく異なった新しい領域に向かってシステムを動かすこともある。

・ブリゴジンの場合、持続的な秩序の形成を示す機構が「散逸構造」である。

・秩序形成の可能性が現実化される際に、システムの開放性が要求されるのである。
流動するエネルギー状態をもつシステムに構造が生じるためには、システムのエントロピーが減少しなければならない。結晶の成長では、外部に熱とエントロピーを放出することによってエントロピーが減少し空間的な構造が作られる。

＜エリッヒ・ヤンツ、”自己組織化する宇宙”から引用＞

- 自己組織化システムは、・・・「回路的組織機構」を示すものばかりである。
システム内に閉じたプロセスの循環があり、それは同時に、他の交換プロセスを通して環境と結ばれている。
環境から孤立したシステムは平衡へと退化し、ひとたび平衡に達するとプロセスは働きをやめてしまう。
システム内で見れば回路的、ないし閉鎖的組織機構であっても、全体として見れば孤立していない。

「回路的組織機構」は、生命システムの特徴をなすものである。

宇宙進化にあつては、ペーテライゼッカー・サイクルが回路的に組織化されている。・・・神経前段階進化ではアイゲンの「ハイパーサイクル」がそうであるし、・・・また神経段階の心、とりわけその反照段階や自省段階における心の働きの特徴ともなっている。

単純な単細胞生物でも、知覚というものは感覚刺激と、それに応える細胞表面上の「エフェクター」の形態的变化、双方を結ぶ「閉じたプロセスの循環」が前提となっている。

- 自己組織化システムのヒエラルキー
アイゲンとシャスター。

変換反応のサイクル全体が一つの触媒として働き、触媒反応のサイクル全体が一つの自己触媒としてはたらき、自己触媒の触媒のサイクル全体が一つのハイパーサイクルとして働く。

変換反応のサイクルも触媒反応のサイクルも、・・・エネルギーを直接、間接に使い、散逸させる。
・・・生物システムは、複雑なネットワークのなかにこのようなサイクルを数多く取り入れているが、それらは共通に使える中間性生物を用いて、さらに大きいサイクルを形成する。(例。ATP)

- 自己創出的自己再生システム。

平衡の次のレベルは、純成長がゼロの自己創出。つまり「自己再生」である。

自己創出システムは、「食べ物」を「排泄物」に変換する「開放的代謝反応鎖」の触媒として機能する。
システムに参入するすべての物質が、代謝される最終生成物も含めて、再循環する。

植物－草食動物－肉食動物。

- 反応物質が準定常状態にある変換反応サイクル。
ペーテライゼッカー・サイクル。細胞の基本的な生化学反応。クエン酸回路。解糖回路。
- 自己触媒ユニットが準定常状態にある触媒的ハイパーサイクル。
インフルエンザ・ウイルスA型の回路的進化は、触媒的ハイパーサイクルを形成する。このサイクルは68年以上のサイクルをもち、人間の平均寿命と対応している。こうしてサブタイプの多くは、人間の体が蓄える免疫作用を逃れる。
- 触媒ユニットが準定常状態にある触媒反応サイクル。
細胞代謝。酵素の生産と活動の調節。生物触媒。
触媒サイクルが細胞間コミュニケーションと走化性の働きを仲介にしながら、アメーバを集め粘菌を形成させる。

- 成長型ダイナミクスをもつシステム。

サイクル構成者の生成と消滅が釣り合っていない場合に出現する。

- 指数成長。

その増加が現在量に比例する成長。

一定利子を生み出す投下資本。倍加時間は一定。10年間で倍加すれば20年で4倍。

「自己再生産」能力をもつシステムのレベルで現れる。

- 双曲線の成長。

指数成長よりも急激。現在量の「2乗」に比例して成長。

倍加時間は2倍になるごとに半分になっていく。

「自己淘汰」の能力をもつシステムで現れる。

- 散逸構造、原核生物、真核生物、これらの三つのミクロ的自己創出レベルを基本的に特徴づけるものは、それぞれの間の移行で”対称性が破れていること”である。

対称性の破れは宇宙進化のときとおなじく、時間と空間を広げる役割をする。

- 脳とは、情報の自己組織化により指示され機能する”コミュニケーション機構”である。

コンピュータがその処理する情報とは無関係なように、脳もその処理する情報とは関係が無い。

ニューロンの回路網はハードウェアに当り、多層的にもなりうる自己組織化ダイナミクスはソフトウェアである。

ここで基本的な要素は、いくつかのレベルで現れるゲシュタルトである。・・・いくら振動数や振動間隔を解析してみても、音楽の一節を聴いて感動する際のゲシュタルトを知ることにはほとんどできない。この場合のゲシュタルトは

聴覚的コミュニケーション・パターンに関わる、高次の組織化レベルで現れるものだ。ゲシュタルトも自らの生命をもつ。あるいはそれ自身、自己創出的存在であると言ってもよい。

「情報の自己組織化は生命の自己組織化の一側面であり、情報が生み出すゲシュタルトは生命のゲシュタルトである」。それは、他の自己創出システムのダイナミクスが生み出すゲシュタルト同様、自律的だ。またそれらには、現実を独自の「象徴的表象世界」のなかに移しかえ、自分の世界を現実から解放す能力がある。現実を変質させ、再構築することができるのである。自己組織化する実用情報は、システム外部のエネルギーや物質のプロセスと干渉し、調整され、システム内で構造化されていく。

- ・・・生態系の「心」はその構成員を支配するものではない。ちょうどアリたちの調整されたダイナミクスがアリのコロニーの「心」であるように、その構成員が示すダイナミクスこそ生態系の「心」に他ならない。制御とか支配とは二元論的な概念である。・・・しかし心とは物質のダイナミクスを通して心自身を表明するものであり、物質と分けて二元論的に考えることはできない。
 - 心とは固定した空間構造のなかに内在するのではなく、システムが自己組織化し自身を再新させ進化させるプロセスの中に内在するものなのだ。平衡構造には心がない。
 - 自省がますます進んでいくのは、宇宙に限らず、進化のプロセス自体である。その原因はいったい何だろうか？ 自己参照性が究極の原理なのだろうか？
・・・構造、機能、宇宙進化総体のゆらぎをも含むゆらぎ、この三つに表現される究極の原理はいったい何だろうか？ ここで自己組織化、すなわち心が、この三つのレベルそれぞれで見出されるのを思い起こすべきだろう。どのレベルも他の二つと入れ替え可能であるが、他の二つの存在説明とはならない。これに対し、「自省段階の心の進化レベル」に達すると、自己参照は自己認知となる。自らを知り、自らを説明するものとなるのだ。
 - 不動の全一、つまり、進化の普遍的始源においては、時間も空間もいまだ展開せざるもの、一全特質（オール・クオリティ）もすべて一体だった。展開が始まるとともに、時間と空間の対称性が段階的に破れていったのである。「自己超越は対称性の破れをとおしてしか達成されない」。だが、同時に、進化は「時間・空間結合」の新たな網を編み上げるなかで、失われた「一体性」を、それぞれの自己組織化システムにおいて再び体験させるのである。
- ※ 私は、ここで謂われている意味は、量子のエンタングルメント、量子論での解釈不明な事象の究極的な説明になるような気がする。
- 我々には今、偉大なる＜新たな統合＞が始まろうとしている。統合の主題は、静的な諸構造の照応ではない。多レベルにわたる自己組織化ダイナミクスの一すなわち心の一相関である。物質、エネルギー、情報、複雑さ、意識、自省、といった多様な姿をとる進化を、「秩序の普遍的な展開における複雑にして全包括的かつダイナミックな現象」と見ることができる。・・・人類の歴史を含む自然史も、「物質とエネルギーの組織化の歴史」として理解される。あるいは、「情報が複雑さや知識として組織化されるプロセス」とも見做せる。なによりも意識の進化、言い換えるなら、自治と解放の、そして心の進化として捉えることができるだろう。

心は、多レベルの自己組織化ダイナミクス、もしくはそれ自身進化し続けるダイナミクスに他ならない。この意味であらゆる自然史は心の歴史である。そして「自己超越」こそ、いや、「進化プロセスの進化」こそ、ここでいう心の進化なのだ。・・・「物質やエネルギーや情報のプロセスの自己組織化」として現れる。
・・・自己組織化の新たなレベルー心の新たなレベルーが切り開かれる自己超越において、意識の和音はより豊穡なものとなるのだ。無限にきわまって、聖なるものと一致する。だが、聖性は人格とかのかたちをとることはなく、むしろ、「多レベルのリアリティの総体的な進化ダイナミクス」として現れる。

6-008

オートポイエーシス・システム(APS)に関する重点のまとめ。 (山下和也) ”システム論的自我”

1. システムは無から有を生むような自己原因による自己創造をやっているわけではない。
構成素の産出とは、すでに存在しているものを変形加工して構成素にすることであり、APSがまったく外物から独立しているということはない。
2. システムは自己言及の論理的パラドックスとも無縁である。
最初の自己の発生は、その自己の働きによるものではない。APSの本質は、自己の発生プロセスと発生した自己の再産出プロセスにある。
3. APSは作動することによって自らを形成しつつ存在する。
APSはシステムのそれ自身による産出である。
構成素の産出システムと構成素の関係は、”私が私を産出する”という仕方で自己言及的になっている。
構成素の産出はシステムの作動のみに依存している。(APSの自律)
4. 様々な構成素の産出過程の”複合”が一つのAPSを構成していることもある。
構成素が物理的実体である必要もない。(コミュニケーションを構成素として社会システム。ルーマン)
5. 構成素の産出プロセスの継続と、構成素の産出そのものとは全く異質の過程であるが、「同時に」進行している。
「産出される構成素はシステムの部分でも要素でもない」。システムは構成素を産出するネットワークであり、いわゆる実体ではなく、産出された構成素、およびそれによって実現している構造とは位相を異にする。
6. APSが”単位体”であるとは、システムが部分をもたず、それ以上分割が不可能ということである。
ネットワーク的作動は、部分に解体しようとする消失する。
7. APSの条件として、産出プロセスの連鎖が、どこかでそれまでの産出プロセスの一つに回帰し、循環的に反復し続けることである。その際全く同じプロセスが反復し続ける必要はない。イメージとして、その都度自分のそれまでの軌跡のどこかと交差するように曲がりながら走り続けているという状態になる。
8. APSは、再産出を反復することによって循環的に作動し、その都度他から区別される一つの閉域を形成するが、この閉域が”システムの自己”である。
その都度反復されることによって、作動に関して閉じて”自己完結”した一つのものになり続けている状態である。

・ルーマンは、意識論としてAPSを展開する。

意識は、それ自身の変容を構成素とするAPSである。
意識システムは、自らを産出する操作から成っており、この産出が停止すれば消滅する。
ルーマンは、自分自身と区別されるものとして理解することを”観察”と呼び、思惟によって思惟が観察されるとする。思惟は観察によって以前の思惟とは異なるものとなって進行していく。
ルーマンの術後では、観察された思惟が”表象”である。

重要なのは、意識における思惟は現れるとそのまま消失する出来事であって、一瞬たりとも止まらないということである。
それぞれの思惟という出来事は、それまでの思惟を観察していることによつてのみ同一性を保ち得るがここに”循環的な再産出の回路”が現れている。

各々の思惟は再帰的、APS的な再産出連関のうちでのみ、その統一を獲得する。だから、意識が自己同一的なものとして存在しうるにはAPSでなければならない。

6-009

エントロピーと生物、進化。

菅野礼司の仮説。

・進化度の三つの指標。

物質進化の定義。進化度を決めるための必要条件。

1. エントロピーの局所的減少過程。

秩序性はエントロピーが低いほど高い。

均一系において、局所的に物質分布の不均一性が生じる。その結果エントロピーの低い部分系が生成される。閉鎖系全体ではエントロピーは増大するのみだが、部分系がエントロピーを外部に放出することで局所的にエントロピーは減少する。

低エントロピーの部分系ができる現象。

原子の結合による分子の形成、水蒸気の凝縮で水滴ができる現象、結晶成長、生物個体の発生、成長

これらの過程で物質代謝や輻射によってエントロピーはエネルギーとともに外部に放出され、その部分系のエントロピーは低くなる。

2. 機能性の増大：シナジー（協同性）効果。

物質系の進化には秩序性（負のエントロピー）だけでは進化としては不十分であり、構成要素間の「協同」による機能性が重要な要素になる。協同性の自由度（膜の振動の自由度など）の生成によってエネルギー転換が増大したり、自由エネルギーの蓄積機構が増大したり、情報伝達や物質代謝を行う機能が発生する。

ここでは協同性やコヒーレンス性は、単に配列や位相が揃っただけの連関性だけではなく、それによって新たな機能が生じるようなものである。例えばボーズ凝縮やフェルミ凝縮系はエントロピーは最低で、量子コヒーレンス状態であるが、機能性はかえって低下する場合がある。

3. 安定性の増大－自己保存能力。

エネルギーの低い状態ほど安定度は増すが、機能性は減少する。機能性と安定性は相反的である。機能性を有するためには「適度の不安定性（柔軟性）」が必要である。

エネルギーの低下とエントロピー減少は平行的である。

内部エネルギーが低ければ秩序性が増す傾向にあるからエントロピーも低い。

「代謝系の安定性を増すためには、体系内で生じたエネルギーとエントロピーを外部に放出する機構が必要である」。

・進化の評価基準。

次の段階への発展性。

外部との相互作用や、代謝が適度に強く、多様であること。

生物の場合は、DNAのミスコピーの確率が適度に高く、且つ多様なミスコピーが起きるほど、不安定ではあるが、次への進化の可能性が増大する。

機能性と安定性は反比例する。

低エントロピー状態と安定性をある程度犠牲にしなければならない。結晶体はエントロピーは低く、安定性では優れているが機能性や次への発展性は低い。

・エントロピーとエネルギーの放出機構。

非平衡解放系を散逸構造として維持しその準安定性を保つためには、体系のエントロピーとエネルギーを適度に保ち、増大しないようにする必要がある。

エントロピーを外部に放出しないと系は熱平衡状態（死）にいたる。

体系はエントロピーの低い物質やエネルギーを外部から摂取し、利用した後の余分なエントロピーとエネルギーを外部に放出して、体系の維持をする。

地球は太陽から来る低エントロピーの”光エネルギー”を吸収し、高エントロピーのエネルギーを低温輻射（長波長）によって宇宙空間に放出している。生物はこの機能を備えた最も優れた体系である。

・「閉鎖系でもエントロピー現象は可能」。

膨張宇宙において「膨張速度」>「エントロピー増加速度」、であればエントロピー密度は現象しうる。

エントロピー密度は、体積の増大とともに急激に減少する。

膨張宇宙はエントロピーに関しては、実質的に「開いた系」と同じである。

状態変化がゆっくり進行する場合や、全体系を部分系に分けたその部分系においては、ほぼ定常状態に近い。その時、全体系のエントロピーは部分系のエントロピーの和になる。エネルギーが保存するとき、エネルギー密度は体積に反比例するから、温度Tも体積の”逆べき乗”で減少する。

s を単位堆積当りのエントロピー (エントロピー密度) は $s = S/V$ 。

$$s = \frac{S}{V} = \frac{N(C_V \log T + R \log V)}{V} \quad \rightarrow \quad s \propto \frac{N \log V}{V} \quad N : \text{全粒子数}$$

C_V : 定積比熱
R : 気体定数

Nが一定のとき s は、ほぼ $\log V / V$ に比例する。
そのため、「エントロピー密度はVの増大とともに急激に減少する」。

- ・「散逸構造の出現は、エントロピー増大則に反する局所的現象である。」

エントロピー増大則の支配する状態では熱平衡状態に移行するため、非平衡散逸系から散逸構造は出現しないはずである。しかし地上では散逸構造が生まれ、自己組織化と進化が進んできた。そのため、この過程ではエントロピー的時間の逆行が起こっていると言える。
地上に局所的な不安定平衡系を作り、散逸構造を出現させる源は、太陽光エネルギーと地球内部の熱である。

エントロピー増大則の下で散逸構造ができるためには、低エントロピーのエネルギーが不可欠である。生物はエントロピー増大則に抗して「自己保存」の機能をもつようになり、更に「自己増殖」の機能を有するようになった。

- ・周囲の状況が不安定なとき、不均衡状態が増幅され、非平衡散逸系 (散逸構造) が出現しうる。
台風、竜巻は、周囲の大気が不安定なとき、大気の不均衡状態が「カオス現象」として発生する。
- ・自ら新秩序を創成する物質系は、環境に比してエントロピーが相当に低い非平衡状態でなければならない。

8-005

ハイデッガー

この思想家はソクラテス以前のギリシャ時代から近代までの哲学者の思想を丹念に研究してきた。彼の思想にはそれらの哲学から得たものとそれらへの批判から成り立っている。ソクラテス以前の哲学者、アリストテレス、デカルト、ライプニッツ、カント、ヘーゲル、キエルケゴール、ニーチェ、ブレンターノ、フッサール、・・・等々。

初期の「存在と時間」にしてもフッサールの影響が大きい。その現象学的分析の手法や実存的カテゴリー的な造語（世界―内―存在、ヒト（世人）、気遣い、了解、道具、配慮、不安、現情性、先駆け、・・・など）にも表れている。「存在了解」を固有の在り方とする人間の実存的・現象論的分析を遂行したものである。転回後は、「現象学は存在そのものへの問い、志向的なものの存在への問いを問わなかった」、と批判している。

そして、歴代の哲学への評価、言及、論述、批判は、すべて「存在への問い」に対する関係の中で行われている。独自の造語は、公然の秘密であり忘却された「存在」を表現するのが如何に難しいかの証左でもあると思う。私はまだ若いころ「存在と時間」を何回となく読んだが、その現象学的な実存的造語にまず慣れることから始まった。しかし著者の強調したい次元の高いあるひらめきのようなものは感じなかった。やたら冗長で要領を得ない。これは著者自身が確信を得てから書いたものではなく、自問しながら未だ不確かだが予感を感じている、というようなところが見て取れた。それは当然であって、存在は与えられたものであるがその意味を人間存在としてどうやって受け止めていいのか、存在とは何なのか誰にも解らないからである。

その後彼の思想は、「存在への接近」をめぐる「転回」とされている。転回前は現象学の手法としての、還元・構成・破壊を固有の手法とした。基礎的存在論に還元し、存在一般の意味を「時間性の地平に立って構成」し、ヨーロッパ存在論を貫く「伝統の破壊」を意図した。転回の前は「存在への関係に立つ人間の本質」を問題としたが、転回後は「存在そのものの本質」を問うように変った。現存在は既に存在に引き渡されている被投されているという自覚の深化がこの転回をもたらしたとされる。おそらく私はライプニッツ研究から本格的になったのではないかと思う。その現れが著書「ニーチェの『ライプニッツ24の命題』」ではないかと推察する。主に私がハイデッガーを「存在」の問題において考えるのは、この転回後の思索の成果の内容である。

私は「存在」の問題に関しては、それを対象化し概念やいろんな手法によりその対象を解明していく、というやり方は存在に関しては成り立たないと考えている。唯一無二であり自己自身を含めすべてがそれに含まれるというなかで相対的な相互規定による定立化（定位化）は成り立たないからである。存在に対して働きかけるということは在り得ずつねに被造物である我々にとって許される形式はもっぱら受動的な「解釈」のみが可能であると考えている。

そのため存在を自分の固有の問題と捉える場合は、直接に自己と存在との迫真的な歴史的、実存的リアリティの関係のなかに立って思索し体感し解釈することである。ハイデッガーは「自分の問題は存在である」、「哲学は存在を思索することである」と言うのであれば、歴代の西洋哲学（形而上学）に存在の本質を見出そうとしても所詮無理な話である。私が知っている限り、西洋哲学において「存在」に関して本質的に問題としたのはライプニッツだろうと思う。だからハイデッガーが歴代の哲学、思想を研究し、そのなかに「存在」の本質を探そうとしても無理だろうと考える。それらは結局は本質的には、存在忘却の歴史だったと理解するための意味はあるかも知れないが。

存在は、公然の秘密として、あるいは問うに値するものではない、という本来の存在の本質に対する存在忘却が人類の歴史のなかに今も流れているのであるからである。ハイデッガーはその実存的カテゴリーとしての造語を多く作り出した。それはフッサールから続く現象学的分析による成果であり、私も自己の実存を常に意識し忘れないようにするためには非常に役立っている。その現象学自体も、存在そのものへの問い、志向的なものの存在への問いを問わなかった。その気づきから転回が始まったのだらうと思われる。

だが私はハイデッガーの思想において非常に不明瞭かつ矛盾が多いことも承知している。ハイデッガー評価においては賛否両論が未だに多くあるのは事実だ。歴代の思想家、哲学の理解においても、彼個人の見識による偏向した解釈や主張がある。しかしそれらにはハイデッガーの存在に関する彼個人の哲学を樹立する上での、つまり新たな存在を中心とした形而上学の構築への使命感にもよるものと考えている。

ハイデッガーには独自の造語が多く、それが更に彼の哲学の理解を困難にしている点も否めない。私は日本語訳しか読んでいないが、翻訳が特段に悪いとは思わないが、しかし妙な違和感を感じる。我田引水的な論理の展開を確かに感じる。また古代の特にギリシャ時代の哲学者の言語解釈においてもその由来に関して独自の考えを持っているようだが、それが当を得たものとは到底思えないものが多いのも事実だ。無理やり強引に自分の考え方に沿うように解釈しようとするのが見え透いている。だがそれらを抜きにしても、「存在への問い」に対する執拗で我慢強い忍耐の思索から、本人があるたどり着いたある予感、確信を感じることはできる。

全般に流れる思想の基調は、ヨーロッパの伝統的形而上学の批判と「存在そのもの」への思索とその歴史性の自覚である。果たしてハイデッガーは、「存在」に関して、ある存在史的、革命的展開・解釈をなし得たのだろうか。

ハイデッガーの前期の思想は、現存在の時間性を地平にして存在の意味を解明しようとしたものだが、後期の立場では、逆に根源的時間は、「自ら明らめつつ隠れる存在の生起」に帰せられ、「存在の生起より現存在が見返され」ている、とされる。

「存在と時間」では、存在はただ現存在からのみ近づき得るとして、現存在を基盤に「了解」されていたが、それ以降は、「人間の本质は存在の真理から由来する」とされ、現存在の実存は「存在の近みに脱自的に居住する」というように転化された。

「存在と時間」以後は、歴代の近代哲学者と対決した。その順番で言えばカント、ニーチェ、ヘーゲル、ライプニッツ。そのなかで西洋形而上学、近代哲学の「存在史的破壊」を行い、形而上学的思惟から「存在の思惟への転回」を遂行しようとした。その際、多くの思想家独自のものを自分のものとして同化し、それを批判的に受容しつつ形成した。

ハイデッガーは歴代の形而上学を廃棄しようとした。そして形而上学の根本問題を問うたものとしてライプニッツを取り上げるが、ライプニッツは存在者を存在に向かって問うという形而上学の伝統に立って提起したものとして根拠の本質が隠されたまま前提となっているとした。

ライプニッツの思惟は、なんといっても「24の命題」で、はじめてその神秘の透明さの極致に達している、とする。著書「ニーチェ」の第八講の第5章、6章、7章において、ライプニッツに対しては、

カントに関しては、存在への問いの欠如、もっと端的にカントの規定、すなわち存在とは「単なる定置」である。

存在を「単なる定置」とするカントの命題は、存在とは現実的な内容あるものではなく、何らかの事物ないしは対象の属性でもない、ということの意味する。としている。

ヘーゲル哲学も絶対者を彼岸に求める形而上学的思惟を批判したことにおいて、ニーチェに先駆けて形而上学の克服を意図した。そしてヘーゲルは絶対者を人間の歴史的な生と内在する精神として把握した。

ヘーゲルは精神の自己発展としての歴史を弁証法論理で構成した。そしてハイデッガーは「存在の命運の恣意」に歴史をゆだねた。

彼の思想が彼の例の政治的活動の評価にも関わらず、なぜ哲学的に神秘的に高く評価されるのか。第一に、それは、存在の意味に対する並々ならぬ情熱的な思索であろうが、もう一つは彼の思索にこもる宗教的な響きにあるのではないと思われる。それに彼の造語の技巧にもあるのかも知れない。しかしこれに対しては第三者による非難が多いのも事実である。ヤスパースは「ハイデッガーの言葉の遊戯は、いらいらさせる」と言っている。

ハイデッガーの文章の、冗長な言い回し、宗教の呪文のように同じことの執拗な繰り返し、複雑そうで意味深な言葉を使って煙にまくようなレトリック性、こじつけ的な強引な論理の展開、カルト的な雰囲気と政治参加への過去、…これらが神秘性と同時に邪悪さを醸し出す。

これらは、例えば自然科学に精通した豊富な知識からの哲学的思索が齎すものとは全く異なるものである。

ハイデッガーが神学から哲学へ転向したその経緯からもその特異な神学的、宗教的雰囲気を醸し出すものを感じることができる。

最初の著書「存在と時間」においてハイデッガーの哲学の全般がすでに現れている。転回以降に発表された著書（講義録）のほとんどは、すべてこの本の中で出ている。歴代の哲学者の解釈と対象になった哲学者、ソクラテス以前のギリシャ思想家アナクシマンドロス、ヘラクレイトス、…他、アリストテレス、デカルト、ライプニッツ、カント、ヘーゲル、キエルケゴール、ニーチェ、…等々とそれへの評価は既にこの最初の著書に登場している。

この書はフッサールの創始した現存在の現象学的分析論の圏域にあると私は考える。フッサールの延長線上に位置するものであり、その実存範疇の特殊な語彙の創出に意味があると言える。キエルケゴールやヤスパースの実存的な心理学的考察からの影響も大きいと思われる。というのもフッサールはヤスパースの「世界観の心理学」を評価していたからだ。

ハイデッガーの意義は、歴代の西洋哲学は「存在」を本質的に問いたさなかったことを批判したことにあると思われる。ニヒリズムと西洋形而上学の関係。

存在と存在物の峻別、存在忘却、存在驚愕らがそこに流れるテーマである。そして歴代の西洋哲学は、「存在者の優位と存在の自明性」によって標識づけられる形而上学としている。著書「ニーチェ」のなかの第八講「存在の歴史としての形而上学」のなかで、デカルト、ライプニッツ、カント、ニーチェ等々に関して言及している。

存在に関する表現が多彩であるが、その本質を言明するには至らず、周辺を迂回しているという感じを受ける。ハイデッガーは存在を敢えて明るみの前に取り出し、その本質を思索し吟味したという点で歴史的である、ということではできであろう。

結論として存在は論理で解明できるものではない超越性とした、のであらうと思われる。それ以上に認識することが可能であらうとは私には思われない。だからハイデッガーの転回後の思索は、当然といえば当然の結果である、と思わざるを得ない。古代語の解釈やヘルダーリン、リルケ、トラークル、ゲオルゲなどの詩人の詩への解釈などに近づいて行ったということと無縁なことではないだろう。

西洋形而上学そして近代哲学の「存在史的破壊」を通じて、自らの存在に対する思索の意義を確保している、と言える。

・ハイデッガーの”第二の主著”といわれる、”哲学への寄与論稿”の批評で、興味を引く下記のものがあつた。

ハイデッガーとウイットゲンシュタインには直接の交流は全く無かつたがウイットゲンシュタインはハイデッガーの『存在と時間』に対し共感を感じていたようだ。
 ところでウイットゲンシュタインは”自閉症スペクトラム(ASD)”であつた可能性が極めて高いという説がある。
 ハイデッガーの他者への共感能力の低さや例の政治活動への参加を考えると、ASDの可能性が高い。
 またASDの人が重要だと考えることと一般的な健常者が重要であると考え方には大きな落差があるそうだ。
 そしてハイデッガーはその生涯において、ちゃんと完成出来た著作というものが1冊も無い。
 ”ハイデッガー全集”は100巻を超えるという多さであるが、著作物での完成物がなく、ほとんどは講義録である。
 ハイデッガーは「書かなかつた」のではなく、「書けなかつた」のではないだろうか。
 ”20世紀最大の哲学者”という評価に対しては、再検討すべきだし、ASDという発達障害の視点からハイデッガーの思想を考察する必要がある。

だがしかし、確かにハイデッガーは、「存在」という暗黙の了解、公然の秘密としての自明事を最も哲学的に最も根本的なものとして歴代の西洋形而上学の「存在忘却」に関して批判し、その意味を思索したのではある。

ウイットゲンシュタインにおいても、初期の『論考』によって叙述された言語の写像の理論は、『論考』以降は、決定的に離れたものとなっている。革命的な思想家にとって転向(転回)は特に珍しいことではない。
 『論考』において「語りえぬものについては、沈黙しなければならない」としているが、ハイデッガーはその語り得ないものを敢えて言葉にしようともがいていたという印象をもつ。
 忘却されてきて今も忘却されている存在の本質を言語に齎そうとする困難に面して、後年は詩人(ヘルダーリン、リッケ、トラークル、・・・)の詩を通して、詩の解釈に傾いていった。結局それはウイットゲンシュタインの謂う沈黙と同じことなのではないかと思われる。存在への全託と受容、と私には思われる。

8-005-01

「存在と時間」に関して。

私は、「存在と時間」以降の思索は、ここで対象化された思索の圏域から、何も真性な哲学に進化発展していないことをあらためて感じるのである。最初の不完全な独断論を唯一の糧として、その後のためにその栄養分を食いつぶすがごとき様を見るのである。

- ヘーゲルが「有」を、「限定されざる直接的なもの」として規定し、この規定を彼の「論理学」のそれに続く一切の範疇の展開の根底においたとき、彼は古代の有論と同じ眼差しの方向に立場をとっていたのである。ただし彼はアリストテレスによって既に立てられていた問題すなわち事象実質を含んだ「諸範疇」の多様性に對比された有の統一性の問題を手離してしまっているのである。
 - 我々がその都度既に或る一つの有・の・理解の内に生きており然も同時に有の意味が闇に包まれているということ、このことが、「有」の意味への問いを反復することの根本から明確な必要性を、証明している。哲学上の諸々の根本概念の範囲の中で、況や「有」という＜根本概念中の根本概念ともいべき＞概念に関してさえも、自明性を拠処として引き合いに出すということは、いかがわしい遣り方である。
 - 有への問いには答えが欠けているのみならず、更に問い自身さえも暗くかつ方向がないということである。
 - 有の意味への立問の内には一般に「循環論証」なるものは存し得ない。何故ならば、その問いに答えることに於いて問題となることは、＜根本命題から＞導出するという仕方での理由付けではなくして、挙示するという仕方での「根底＝露開」である、からである。
 - 有の意味への問いの内には、「循環論証」なるものは決して含まれていないが、しかし乍ら確かに、或る注目すべき関係、すなわち問われているもの（有）が、或る有るもの＜現有＞の有・の・様態（有り方）としての問うことへ反転的に関係し帰されているとか、あるいは、問うことが問われているものに先立って予め関係づけられている、という関係は、含まれている。
 - 一体何故にカントは「とき性」という問題点の内への洞察が拒まれたままに留まらざるを得なかったか。まず第一に「有の問い一般」を閑却したということ、第二に先行的にして有論的な分析を欠いていたということである。・・・カントはデカルトの定立を、独断的に継承したのである。・・・カントのなした時間の分析は、この現象を主観の内へ取り戻したにも拘わらず、伝承された通俗的時間理解に方向づけられたままに留まった。
 - デカルトの有論的定立を継承することによって、カントは或る一つの本質的な閑却を、すなわち現有の有論を等閑に付するということをして「デカルトと共に」なしている。
 - 時間についてのアリストテレスの論攷は、一切の後來の時間観を一ベルグソンのそれも含め一本質的に規定している。カントの時間観がアリストテレスによって明るみに取り出された諸構造の中で動いている。・・・カントの有論的根本方向が＜根本において＞ギリシャ的な方向に留まっているということである。
 - 不安という根本情態性。
不安の何に面しては、世界の＝内に＝有ること、そのことである。
不安の何に面しては、世界としての世界で有る。
不安にするのは、手許に有るもの一般を可能にしている可能性であり、すなわち、世界それ自身である。
不安になることは、世界を世界として根源的に而も直接に開示する。
不安が情態性の様態として初めて世界を世界として開示するのである。しかしそのことは、不安に於いて世界の世界性が概念的に把握されるということの意味するのではない。
- 何に対して不安は不安になるのかというその何に関しては、世界の＝内に＝有ること、それ自身である。
不安になることは情態性として、世界の＝内に＝有ることの一つの根本的有り方であるからである。
不安という現象を以って或る一つの卓抜な情態性が解釈の主題となった、ということである。……不安が根本情態性としてそのような仕方での開示ということ、そのことの最も囚われざる証拠となっているのはまたしても、日常的な現有解釈と話しとである。情態性は、「どういふ気がするか」ということを頭にする。不安のうちでは、「無気味」である。・・・併し、その場合同時に無気味さは、「家に在って＝安らっている＝のではない」ということをも意味している。

- ・”内に＝有ることの実存論的意味を「内部性」という範疇的意義から区別して明らかにした際、内に＝有ることは・・・のもとに住むこと、・・・と慣れ親しんでいること、と規定された。内に＝有ることのこの性格は、それから、ひと、そういうひとくという有り方＞に属する日常的公開性によって一層具体的に見え得るようにされた。それに反し、不安は現有を、彼が「世界」の内に頹落(タイラク)しつつ没入していることから、取り返すのである。日常的な慣れ慣れしい親しさはそれ自身の内で瓦解する。＜そこに於いて＞現有は孤立化される。併し乍らそれは、世界の＝内に＝有ることとして孤立化されるのである。内に＝有ることは、家に＝安住せずという実存的「様態」に入ってくる。他ならぬこのことを「無気味さ」と言うことは謂っているのである。
- ・現有が無気味さを理解している日常的な仕方は、頹落しつつ、家に安住して＝いないことを「遮蔽しつつ」＜無気味さから＞離反するという仕方である。併し乍ら、この逃避が日常的であるということ＜すなわち毎日毎日行われていること＞は、現象的には次のことを示している。すなわちそれは、世界の＝内に＝有ることという本質的な現有体制には、その体制は実存論的な体制として決して直前に有るのではなくして、それ自身常に、事実的に現に＝有ることの一つの様態においてすなわち情態性においてあるのであるが、その体制には、不安が根本情態性として属しているということである。
- ・気休められ＝慣れ親しんだ世界の＝内に＝有ることは、現有の無気味さの一樣態であって、その逆ではない。家に安住して＝いないことの方が、実存論的＝有論的には、一層根源的な現象として把握されねばならない。
- ・不安になることは、情態性として、世界の＝内に＝有ることの一つの有り方であり、不安の何に面しては、被投的に世界の＝内に＝有ることであり、不安の何に関しては、世界の＝内に＝有り＝得ることである。従って、不安という現象の全相は、現有を事実的に実存しつつ世界の＝内に＝有ることとして示している。＜すなわち＞この有るものの基礎的な有論的諸性格は、実存性と事実性と頹落して有ることである。・・・これらの諸規定の内には或る一つの根源的な聯関(レンカン)が生きて働いており、その聯関が構造全体の＜ここで＞求められている全体性を成しているのである。
- ・最も自己的な＜仕方＞有り・得ることへ関わりつつ有ることは、有論的には次のことを意味している。すなわち現有は彼の有においてその都度既に彼自身に「先立って有る」と。
- ・現有が事実的に実存することは、被投的に世界の＝内に＝有り＝得ることであるのみならず、常にまた既に、配慮された世界の内に没入してしまっているのである。この・・・頹落的に有ることにおいて、表面的にであると否とに拘わらず、無気味さに面してそこから逃避することが通告されており、その無気味さは、ひとくという有り方＞の公開性が一切の馴れ親しめないことを抑圧しているが故に、大抵は潜在的不安とともに覆蔽されているのである。それ自身に＝先立って＝或る一つの＝世界の＝内に＝既に＝有ること、そのことの内には本質上、配慮された内世界的に手許に有るものの許に頹落しつつ有るということが一緒に含まれている。
- ・従って、現有の有論的構造全体の形式的に実存論的な全体性は、次のごとき構造において捉えられねばならない。すなわち、現有の有とは、(内世界的に出会われる有るもの)のもとに＝有ることとして＝それ自身に＝先立って＝(世界)の内に＝既に＝有ることを、謂うと。
- ・無気味さは、日常的には覆蔽されているとはいえ、世界の＝内に＝有ることの根本的有り方である。
- ・悟性的理解性が配慮するのは、「理論的に」せよ「実践的に」せよ、見廻し的に見渡し得るものだけである。悟性的理解の特質は次の点に存している。すなわちそれは、その理解性は、ただ「事實的」に有るものだけを経験し、有を理解するようなことは免れ得ると思いついでいる、という点である。その理解性は、有が、たとえ概念的に把握されていなくても、既に理解されてある場合にのみ、有るものが「事實的」に経験され得るということ、を、誤認している。

世界の超越の時性的問題。

- ・世界を可能にしている実存論的＝時性的制約は、時性が脱自的統一として地平というようなものをもっている、ということに、存している。・・・脱自態には＜何処へ脱自して行くのかという＞何処へという＜先行＞が属している。・・・現在の地平的図式は、する＝ため、＜という構造＞によって規定されている。将来と既有性と現在との諸地平的図式の統一は、時性の脱自的統一に基づいている。＜その地平的諸図式の統一たる＞時性全体の地平は、事実的に実存する現有が本質上何処に向かって開示されて有るかというその何処に向かっていうことを規定している。

事実に現に＝有ることと共に、将来の地平には何らかの有り・得ることがその都度企投されており、既有性の地平には、「既に有ること」が、その都度開示されて有り、現在の地平には配慮されているものがその都度発見されて有る。かくして三つの脱自態の三つの図式の地平的統一が、する＝ため＝諸関聯とく究極的な＞の＝ために、との根源的関聯を可能にしている。

このことの内に次のことが存している。すなわちそのこととは、時性の脱自的統一の地平的体制を根拠にしてその都度彼の現で有る有るもの＜すなわち現有＞には、開示された世界というようなものが属している。ということである。

- 世界の＝内に＝有ることを時性の脱自的＝地平的統一へ帰着せしめることに依って、現有のこの根本体制(すなわち、世界の＝内に＝有ることを)を実存論的＝有論的に可能にしている可能性が理解され得るようにされたのである。
- 有の理念の解釈が可能になるためには、それに先立って「現有の時性」を明るみに取り出すことが必要とされるのであり、そのことに、世界の＝内に＝有ることの今なされた性格付けは仕えているのである。

現有的空間性の時性。

- 脱自的＝地平の時性に基づいてのみ、現有によって且つ現有にとって空間が烈開(すなわち空開)されることが可能である。＜それゆえ＞世界＜すなわち脱自の時性全体の地平＞は空間の内に直前的に有るのではないが、併し乍ら、空間はただ世界の内部においてのみ発見され得る。かくして現有的空間性＜を可能にしているところの＞脱自の時性こそ、まさしく空間が時間に非依存的にあることを理解され得るようにするが、しかし逆にまた現有が空間に「依存的であること」をも理解され得るようにするのである。

・・・そういう空間的諸関係から時性は、理解において総じて理解されているとともに解釈され得るものを、分節するための諸々の手引きを取り出してくるのである。

- 日常性という呼称によって謂われていることは根本において「時性」に他ならず、しかも時性は現有の有るを可能にしているが故に、日常性を十分に行き届いた仕方では概念的に境界づけることは、有の意味一般と有の意味の可能な諸転化態とを根本から決定的に究明することの枠内において初めて成し遂げられ得るだろう。

・・・以下省略。あまり意味のないことが延々と描かれる。

この「存在と時間」は、存在の意味を問うための問いを具体的に仕上げることであり、と言える。

- K・レーヴィットは謂う、「存在と時間」以後では、自己の自由はもはや存在可能の自由とは規定されず、存在享受の自由と規定され、それに応じて、覚悟せる態度は、「己を閉鎖しない」境涯へと移調されている。覚悟とはもはや断固と決断した態度のことではなく、現存在を存在者の中への執われから存在の明るみへと開放することなのだといわれる。存在と時間においては覚悟とは、「世間的存在」に対抗して生きる本来的自己存在の根本気分であり、根本規定である。それが、覚悟とは、あらゆる存在者がそこへ立ち現れてくる存在の、開かれたところ、隠れなきところ、真なることへ参加することなのである。
- 存在と時間の中には確かにいくつかの素晴らしい現象学的分析がある、しかし全体は、存在なき存在論であり、存在論に値しないものである、という批判があるのも事実である。
- K・レーヴィットが、「ハイデッガーの言葉の危険は人を籠絡し、それゆえ開放するよりもむしろ呪縛することにある」と批評するように、若くして彼の著書に接した私にとって、この言葉は重くのしかかる。

以上、これらを再度読んでみて感じることは、この「存在と時間」以降のいろんな書物(講義録)は、すでにこの最初の著作の中にその素材、問題とされる課題などは既に含まれていて、それ以降は再度その不完全なものから題材を取り上げ、不完全な思索によって不完全なまま曖昧化していることに気づくのである。

この不完全で独断的な、現象論的実存分析は、フッサールの延長線上に不完全な分析をさらに不完全に追加したという位置づけにあるとしか私には思えないのである。

ハイデッガーは、20世紀最大の哲学者と言われるが、それはほとんどないドグマなのではないかという疑念が、かなり前から私の中にあることは事実だ。

しかし私は思想家や哲学者を探索しているのではなく、彼らが対象とした存在そのものに関心があるのであって、それらの思想家自身に関しての興味は二の次と言ったほうが正直なところだろう。

最初にヤスパースの批評を載せる。次に弟子で「存在と時間」の草稿を見たことがあるK・レーヴィットの批評を載せる。ただしハイデッガーの例の政治絡みのことは除く。
ヤスパースもレーヴィットもハイデッガーとは直接かかわっていた人物である。ヤスパースは最初は友人として、そしてレーヴィットは彼の弟子として。だから彼ら二人の評価には耳を傾ける価値があるのである。

ハイデッガーがニーチェを理解していなかったとする考えは、ヤスパース と レーヴィットで共通している。
しかしヤスパースとレーヴィットの間には少なくともヤスパース側からは互いに溝がある。
そのあたりは”ハイデッガーとの対決” を参照。

8-005-02

ヤスパースから見たハイデッガー観。

1. ハイデッガーは「研究」と「哲学」を何ら区別していない。かれにとって現象学は、・・・とにかく諸成果をもたらす「探求」なのである。
・現存在解明と、実存解明が区別されていない。
ハイデッガーでは、存在了解をもつ存在者、つまり人間が「現存在」と呼ばれ、その現存在の存在が実存と規定されている。ヤスパースは、「現存在」を「われわれである包括者」の様式、「物質・生命的身体・心・意識」など自然的ありかたをした「外的な自己」としての人間の表示に用い、・・・現存在、意識一般、精神等に存在意義を与える根拠、根源である実存を、現存在と区別している。
・強みは、「世人」、「死へとかわる存在」である。
2. この哲学は、現存在解明でありながら実存解明なのであり、したがって両者ははっきりと区別されていない。最後に、この哲学は現存在解明でありながら超越作用なのである。
3. ジャーナリズムにおいては、ハイデッガーの魔力による呪縛や、なにか「畏敬」のようなものがみられる。
多分、ハイデッガーの著作は、私のそれよりもはるかに重要なのであろう。
私には、私の方がより誠実に、真理を求めて労苦しているように思われるのだが。
4. ...したがって、人間存在と哲学的思索とは分離できないのであり、ただたんに思想だけを解釈するのではなく思想の中に、その思想を考えた哲学的人間を見なければならないのである。
5. ハイデッガー。
古いテキストは、彼の手にかかると、雄弁にものを言い始めるようになる。・・・かれは勝手な訳し方をする。最も自明なものが、そこにはまるで存在しないかのようだ。ところがそこで自明なものを、私は理解しえない。同時代人のなかで最も刺激的な思想家――その理由を知らず。
6. 彼からほとんど何も学ぶことができなかった。
このような内面的に本心から真に私が理解しえぬ哲学的思索が今日事実として存在するという点を除いては。伝統的なもったいぶった大学教授連の講談哲学の克服という点での彼との協同戦線。
理性と愛とのより高度に明確な把握と、暗号世界の言語への聴従に向かって、私は、彼から遠ざかった。
・・・独自の基礎をもつ、このような哲学の不明確さ。
だれも、どのように考えてよいのか、わからない。――哲学と生の現実との間のアナロジー。
7. ハイデッガー
現実への盲目性。政治、経済、医学、諸科学、およそ一切の現実への信じがたい程度の無知。
最近著された何冊かの書物は、これまでのところ、それにふさわしい仕上げを少しも伴っていない。
実際行き詰ったのか。継続し得ないということは、この「技巧的な創作物」の本性のなかに宿っているのか。
それ以降はただ、アフォリズム、ささやき、――約束のみ。
「存在と時間」の中絶に対して彼自身の与えた理由は、彼の創作に対して全体的意義をもつのか。

根本的な自己省察はなく、ただ存在省察のみ。存在論のための実存哲学の拒絶は特徴的である。
二つの領域の並存。――そこから、感動と感激における、瞬間的な誠実さにも拘わらず、全体としては取り除きえぬ曖昧さ。――ヴェールを被った現存在、深淵的な「不誠実さ」の現存在。
8. 「存在」について、ハイデッガーは、なにしろ、それが言葉のなかに住むとしか言わない、――それから先はすべて比喩なのである。すなわち、存在の「明るみ」――「番人」――「牧人」など。